

「知的努力」としてのベルクソン宗教哲学

松尾 太陽

La philosophie de la religion de Bergson en tant que “l’effort intellectuel”

MATSUO Hiroaki

序

本稿は、アンリ・ベルクソン（1859-1941）の思想を「宗教哲学」という観点から読み解いていくための、ひとつの手がかりを提示するものである。しかし、はじめに断っておかなければならないのは、筆者はここで「宗教哲学」という言葉の意味を広く捉えているということである。宗教哲学という語は、狭義には哲学の立場から宗教の本質やあるべき姿について探究する、啓蒙主義の影響下に成立した哲学の一ジャンルを示す。しかし、そもそも哲学と宗教は古来より原理的な問いを共有しつつ、同時に激しい緊張関係を保ってきた。そうした歴史的経緯を踏まえ、両者が切り結んできた領域全体をその源泉から問いただしていく営みもまた、広い意味での宗教哲学と呼びうるだろう¹。筆者の関心は、ベルクソンを後者の意味での宗教哲学として読んでいくことにある。

というのも、ベルクソンの著作の中には、このような哲学と宗教の一筋縄ではいかない関係が見て取れる。ベルクソンの宗教哲学というと、まずは最後の主著『道徳と宗教の二源泉』（1932、以下『二源泉』）が問題となる。『二源泉』は一見したところ、哲学者の立場からさまざまな宗教的事象を「動的宗教」と「静的宗教」という二項対立の下に回収する、哲学的宗教論の書に映るだろう。しかし、彼の議論、とりわけ「動的宗教」をめぐる記述を精読し、またそれを『二源泉』以前の著作や論文で展開される議論とも突き合わせていくと、哲学と宗教の抜き差しならない関係が至るところに見出されるのである。

だが、たんに哲学と宗教の緊張関係を読み取ることだけが目的ならば、より研究対象に相応しい思想家は他にいくらでもいるだろう。その中でベルクソンにおいて特筆すべきなのは、その思索がつねに同時代の実証科学と対峙し、それを乗り越える形で紡ぎ出されたものであるという点である。彼の宗教哲学もまた、『二源泉』における社会学や人類学との対話にとどまらず、それ以前の著作で心理学や脳神経科学、生物学などの批判的検討を経て提示された多くのモチーフをも継承するものとなっている。筆者が考えるところのベルクソン宗教哲学の魅力の一つは、このような実証科学との対話可能性にある。

以上のことから、筆者は(1)ベルクソンにおける宗教と哲学の緊張関係を、(2)実証科学との連関も踏まえて論じることを当面の課題に据えている。本稿はそのための、いわば予備作業として位置付けられる。

まず(1)に関しては、さまざまな論点が思い浮かぶ中で、さしあたり本稿では言語の問題を切り口に両者の構造的類似を示すことを試みる。よく知られているように、ベルクソンは最初の主著『意識に直接与えられたものについての試論』(1889、以下『試論』)以降、一貫して言語批判の立場をとっている。ベルクソンにとって言語とは、本来生きられたものであるはずの实在を概念によって固定的なものに再構成し、その微細なニュアンスを取り零してしまうものであった。しかし、「形而上学入門」(1903)²をはじめとするその哲学的方法論を読み解くと、彼が記号化を拒む「直観」(intuition)の立場に立ちつつも、それを言語化していく過程にも目配せしていたことが伺える。そして、同様の構造が『二源泉』の動的宗教論にも見出される。『二源泉』では、共同体の存立を目的とする「閉じた道徳」に対置させる形で人類全体を抱合する愛としての「開かれた道徳」が示され、その起源がキリスト教神秘主義において結実する「動的宗教」に見出される。そして開かれた道徳-動的宗教は「熱望、直観、そして情動」(DS63)であり、原理的には傑出した人格たる「神秘家」(mystique)の「呼びかけ」(appel)を実際に前にした者のみが感得できるとされる。しかしながら、ベルクソンは同時に福音書の表現に着目するなど、動的宗教の言語化にも一定の可能性を見出していたと思われる。以上のことから、本稿ではまず「形而上学入門」の哲学的方法論と『二源泉』の動的宗教論の突き合わせを試みる。

(2)については、本稿では上記の比較検討で示された構造の類型性をより詳細に表しているものとして、論文「知的努力」(1902)³に着目する。「知的努力」は一見して心理学の論文であり、またその内容の多くは『物質と記憶』(1896)の記憶/知覚論で導出されたモチーフに依拠している。本稿では「知的努力」の議論が哲学的直観ないし動的宗教の言語化の問題へと適用しうることを示すことで、ベルクソン宗教哲学を多様な文脈と接合させる可能性の一例を示したい。

一 哲学：「形而上学入門」における直観と言語

ベルクソンは「形而上学入門」の冒頭で、我々が対象を認識する際の二つのあり方として、「直観」と「分析」(analyse)の二項対立を提示する。分析が対象をその外部から認識する仕方であり、特定の視点に基づき記号へと翻訳された相対的で不完全な認識であるのに対し、直観とは「対象の内部に身を置き、その対象が持つ唯一のもの、すなわち表現不可能なものとも一致する共感(sympathie)」(PM181)であり、我々の視点に左右されない絶対的で完全な認識であるとされる。たとえば、小説の登場人物について作者が語る個々の事柄は、すべて特定の視点のもとに記号化された表現である。そこでは既知の人や物の共通要素のみが表現され、その人固有の、本質的なものは表現され得ない。それゆえ、そうした事柄を無

数に積み重ねたところで、登場人物が私に対して一挙に与えられ、私が「単純で不可分な感情」(PM179)を抱く瞬間には及ばない。そして、このような私と登場人物とのシンクロこそが、ベルクソンの言う絶対的認識としての直観に該当する。

その上でベルクソンは、実証科学が分析を通常の機能とするのに対し、実在を直観によって把握することが可能であるとすれば、それこそが形而上学であるとする。そこから導出されるのが、「形而上学は記号なしですませようとする科学である」(PM182)という命題である。

このような絶対的認識としての直観が実際に可能な例として、ベルクソンは第一に「持続する我々の自我」(PM182)を挙げる⁴。周知のように、ベルクソンは『試論』以来、我々の意識を先行する意識状態と絶えず融合し、相互に浸透し合い、有機的に組織化された「持続」として捉えてきたが、それらは誰しもが内的聴診によって直観しうる。しかし、それを言語という記号によって表現しようとした場合、それは最終的には必ず頓挫してしまう。

というのも、我々の内的生の持続は、たとえば巻物や糸、スペクトルといったイメージによって例えうるものである。しかし、このようなイメージからは「進行する運動の単一性」と「多様な状態の広がり」(PM185)という二つの側面を有する持続の展開を語り尽くすことはできない。また、抽象化・一般化を目的とする概念は、イメージにも増して持続の表現には不向きである。たとえば、自我の持続とは多様な統一であり、「一」と「多」という相反する性質を有している。しかし「一」や「多」という一般的な概念から出発して持続との一致を目指そうとした場合、どちらの概念に重点を置くかによって持続についての捉え方は全く異なるものになってしまい、結果的に持続そのものを把握することには失敗してしまう。要するに、我々の知性が概念化された「部分」(partie)によって持続という対象の全体を再構成できると錯覚してしまった結果、そこから相異なる複数の体系が生じ、学派間の不毛な論争へと至ってしまうのである⁵。

しかし、ベルクソンにおいて直観こそが哲学の方法であり、それが原理的には「記号なしですませようとする」ものであるにせよ、哲学するという営為は徹頭徹尾言語を介したものであり、現にベルクソン自身もまた哲学書を著している。概念によってもイメージによっても直観された実在そのものを完璧に記述することは不可能であるならば、哲学者が用いる言語表現とは一体いかなるものであるべきだろうか。

「形而上学入門」の中から取り出せるヒントとして、ここでは(1)多様なイメージの駆使、(2)概念ならぬ概念の裁断、の二つを挙げておこう。

まず(1)は、あらゆるところから多様なイメージを持ち出してくることによって、それらの先にある直観へと意識を差し向けることができる、というものである。ある特定のイメージが優勢になってしまった場合、上述した理由で実在そのものを把握することはできない。それゆえ、読者を直観へと導くためには、多種多様なイメージに同程度の注意を注がせることが肝要となる(PM185-186)。

続いて(2)は、「対象について、その対象だけにしか合わない概念を裁断する」(PM197)というものである。一つのものにしか当てはまらない以上、それは概念とは言えないような概念である。この「概念ならぬ概念」は、「統一」や「多様」といった既存の概念によって何かを語ろうとした場合には取りこぼされるような「単純で独自のもの」(ibid.)へと我々を導くものであるとされる。

このように、ベルクソンはイメージや概念の限界を指摘しつつも、実在そのものを語ることに一定の可能性を認めている。少なくとも「形而上学入門」からこれ以上踏み込んだ言語論を読み取ることは難しいが⁶、実際にベルクソン自身が著書のなかで様々なイメージを動員し、既存の概念に回収されない独自の述語を生み出していく手つきに、(1)および(2)の実践を見出すことはできるのではないか⁷。

二 宗教：『二源泉』における創造的情動と言語

序文で述べたように、『二源泉』のベルクソンは動的宗教を起源とする開かれた道德の核を、傑出した人格である神秘家の呼びかけに見出す。閉じた道德が複数の非人称的な責務へと分離し、体系化されることによって強化されるのに対し、開かれた道德は神秘家によって体現されたものを人々が共通に模倣することによって一般性を獲得する(DS29-30)。ベルクソンによれば、人間の自然本性に属する閉じた道德とは異なり、神秘家の出現という歴史的事実によって後から獲得されたものであるはずの開かれた道德がこのようにして広く伝播していったのは、「感受性」(sensibilité)による力である(DS35)。ベルクソンは、人々が神秘家の呼びかけに呼応していくさまを、音楽とのアナロジーによって捉える。すなわち、閉じた道德である責務を前にした時とは異なり、神秘家の呼びかけを前にしたとき、我々がそれに抵抗を感じることはない。しかしながら、それは「通行人がダンスへと駆り立てられるように、我々をそれらの感情のうちに導き入れ」る(DS36)。神秘家の呼びかけは、このようにして我々を情動的に調律し、抵抗を伴わずして服従させるのである。

ベルクソンによれば、ここでいわれる「情動」とはたんに対象によって引き起こされるようなものではなく、神秘家によってそのつど創造されたものである。ジャン・ジャック＝ルソーが山という対象そのものによって引き起こされる諸感情を寄せ集めて新たに独自の情動を創造したように(DS37-38)、あるいはキリスト教神秘主義が元来女性が男性に対して吹き込んできた諸感情からロマネスクの恋愛感情を創造したように(DS38)、神秘家によってもたらされる情動は感覚的・自然的感情に還元されない創造的性質を有しているのである。

また、このような情動は、一つの観念やイメージに続いて生起する「知性以下の情動」とは異なり、むしろそれらの表象の原因というべき「知性以上の情動」である(DS41)。たとえば「ほとんど文学作品とは言えないような戯曲」(DS44)に感情を刺激されるような場合、その情動は我々が人生の中で日常的に体験する月並みな情動から引き取られ、表象による一般化を通して導かれた「知性以下の情動」である。しかし、「偉大な演劇作品」(ibid.)が

我々にもたらす情動はこれとは根本的に異なり、詩人の魂のうちに出来たものである。詩人はその情動に導かれて作品を創作したのであり、その意味でこちらは表象を包含する「知性以上の情動」なのである。

以上の議論は、知性にもまた二種類の区別——「理解し、議論し、受け入れたり拒絶したりする、要するに批判 (critique) にとどまる知性」と「発明する (inventer) 知性」——が存在することを意味している (DS42)。前者は自己充足する知性であるのに対し、後者は情動によって突き動かされ、創造を担う。ベルクソンはその具体的事例として、文学作品の創造のプロセスについて考察している。すなわち、「批判にとどまる知性」における観念がすでに既存の「語 (mot) という鋳型に流し込まれて」(DS43) いるのに対し、「発明する知性」における観念は「精神そのものによって形成された諸観念」(ibid.) であり、既存の語による分節化を経由せず一挙に成立したものである。それゆえ、書き手がそれを表現しようと試みた場合、既存の語には諸観念に適合するよう「無理強い (forcer)」(ibid.) せざるを得ない。このようにして、「発明する知性」の表現にあたっては諸観念と語との間にせめぎあいが生じることになる。

そして、以上のような創造的情動と言語との葛藤が開かれた道德-動的宗教において顕著に現れている事例として、ベルクソンは福音書の語りに着目する。彼はいわゆる「山上の垂訓」において繰り返される「あなた方も聞いている通り……である。しかし、私は……とっておく」(DS58)⁸ といった具合の対句を「矛盾すれすれ」(ibid.) の表現と形容し、その遂行性に一定の評価を与える。ここに、通常は無矛盾的言明を拒む領域をあえて語ろうとすることの、一つの可能性が示されていると言えるだろう。

三 「知的努力」との接合

以上の整理によって、ベルクソンの哲学的方法論と動的宗教論が、とりわけ言語との関わりにおいて構造的類似を有していることがわかるだろう。すなわち、両者ともに、言表不可能なもの直観ないし感受に力点が置かれつつも、同時にそれを言表しようとする次元が問題にされている。きわめて単純化した言い方をすれば、そこで問われているのは「語り得ぬものを語る」仕方である。そして、このような問題系は「知的努力」の議論と接合しうるものである。そこで、本節ではまず「知的努力」の内容を要約し、続いて比較検討を行う。

「知的努力」の冒頭でベルクソンは、過去の事柄を思い出したり、現在の事実を解釈したりといった知的な営為を、緊張した態度と弛緩した態度に大別する。そして、両者の差異が努力の感情の有無に存するとした上で、「知的努力の知的な特徴とは何だろうか」(ES154) という問いを提示する。

結論から言ってしまうえば、ベルクソンは、あらゆる知的努力を「動的図式」(schéma dynamique) がイメージへと発展していく過程として規定する。しかし、ここでキー・タームとなる「動的図式」は一義的な定義を拒む幅を有するものであり、それゆえ「知的努力」

というテキスト自体が、その内実を手を替え品を替え叙述しようとする試行錯誤の軌跡とでもいうべき内容になっている。本稿ではベルクソン自身の区分に即し、「想起」(rappel)「知解」(intellection)「発明」(invention)という三つの知的営為における努力のあり方について、それぞれ整理していく。

まずは想起について検討したい。ベルクソンは、想起は一般に機械的なもの(自動作用)と知性的なもの(反省)との混合によって成り立っているとしつつ、どちらか一方に偏った極例の検討を通して想起における知的努力の本質へと迫ることを試みる。まず機械的想起の極例としては、奇術師ロベール・ウーダンの『打ち明け話』が挙げられる。そこでは、彼が自分の息子に対して記憶力の訓練を課した結果、店頭に提示された商品の数々や書庫に蔵された大量の本のタイトルを瞬時に記憶できるようになった事例が記述されている。ベルクソンは、『物質と記憶』において展開された「意識の諸平面」の議論¹⁰を援用しつつ、このような想起にあっては知性が視覚イメージの平面に固定され、あらゆる解釈が拒まれているとする。これに対し、努力を伴う想起とは、複数の意識の平面を縦断するものである。たとえば本の内容を記憶する場合、まず文章を熟読し、それを節や段に区切ることで全体を図式的に把握する。そして、そこからそれに見合った特徴的な観念を見つけ出し、その観念にまた従属的な観念を連結していき……という過程を繰り返すことで全体を想起していく。このように、想起における知的努力は、まず「多くのイメージが唯一で単純で不可分な表象に凝縮すると思われる一つの点」(ES160)に身を置き、そこからピラミッドの頂点から底面へと下っていくようにして諸々のイメージや言葉へと展開されていく過程に存する。そして、ここでピラミッドの頂点に例えられる全体の図式こそが、ベルクソンが「動的図式」と呼ぶものに該当する。それは「それぞれのイメージを貧しくして得られる抽出物」(ES161)や「全体の要約」(ES164)といったものではなく、「諸々のイメージを再構成するために必要なことの指示を含んでいる」(ES161)ものである。

同様のことが、知解における知的努力においても言える。まず、努力を要さない知解作用とは、たとえば日用品を的確に使用する場合や、「平凡な問いに対する出来合いの答え」(ES168)からなるようなほとんどの日常会話において見出されるものである。これらの場合、我々の行為は習慣によって自動的に導かれており、対象について深く理解したり、会話の意味に関心を向けたりする必要はない。これに対し、読んだり聞いたりするものを解釈しようとする場合、我々はまず対象の抽象的な意味から出発し、続いてそれを表象されたイメージへと展開し、知覚されたイメージとの擦り合わせを図る。そして、両者が完璧に重なり合ったとき、知覚は完全に解釈される¹¹。

最後に、ベルクソンが「知的努力のもっとも高度な形態」(ES174)とみなす、発明における事例を検討しよう。ベルクソンによれば、何かを想像してつくり出そうとすることは、まずはじめに最終的な目標の全体を思い浮かべ、次に部分的な要素を集めてその目標へ到達しようとする試みである。たとえば、音楽家や詩人といった芸術家の場合、まずは音や言葉へと展開されるべき単純で抽象的な印象が思い描かれ、それを満たすべくさまざまな具体

的要素が動員されることによって作品がつくり出される。もっとも、制作の過程でイメージによって当初の図式が変容させられる場合もある。とはいえ、発明の努力もまた抽象的な図式から具体的なイメージへの組織化に見出されるという点において、その他の知的努力と共通するものである。

これまでの整理を経て、「動的図式からイメージへ」というかたちで規定される知的努力の内実が浮かび上がってきた。そして、ベルクソンの哲学的方法論と動的宗教論がともに既に言表された部分¹²から出発して全体を構成していくのではなく、まず(1)対象それ自体ないし創造的情動へと一挙に到り、続いて(2)それを極力損なわない形での言語レベルでの組織化が図られる、という過程を取ることを踏まえれば、両者はともに知的努力の一種であると言えるだろう。

しかし、だとすれば、両者は本節で見てきた知的努力のさまざまなバリエーションの中で、それぞれどのように位置付けられうるだろうか。

動的宗教において創造的情動を言表していく過程は、まさに発明における知的努力に符合するものであろう。というのも、想起と知解における知的努力がすでに与えられたものの再構成であるのに対し、発明の努力にあっては唯一、新しいものの創造がなされているからである¹³。また、その過程が文学作品の制作になぞらえられている点でも両者は一致している。

では、哲学の場合はどうだろうか。ベルクソンのいう哲学的直観が対象を正確に認識することであるとすれば、それは一見して知解の努力に該当するように思われるかもしれない。しかし、「知的努力」の記述を見る限り、知解の努力とされている事柄は日常的な知覚の範疇を出ていない¹⁴。一方で、発明の努力が問題の解決と結びつけられていること(ES174)、また随所で哲学と芸術創造との類似性が指摘されていること¹⁵など、哲学的直観の言語化過程を発明の努力と結びつけうるヒントはいくらか見出せる。それゆえ、さしあたりの応答としては、哲学における知的努力は知解の努力の延長線上にあり、かつ発明の努力との符合も見られる、といった言い方になるだろう。

そして、哲学と動的宗教の双方に共通して言えるのは、「知的努力」の中で挙げられている諸事例と比べて、前提として言表不可能性が強く意識されている、ということである。想起および知解の努力に限らず、発明の努力においても、「数秒で終わることもあれば、数年かかることもある」(ES182)という記述が示すように、それがいずれ結実し、終息を迎えることが前提されているように思われる。これに対し、あくまで直観ないし「知性以上の情動」自体に力点が置かれる哲学や動的宗教の場合には、少なくとも権利上は「語り得ぬものを語る」ための不断の努力が要請される。その意味で、哲学および動的宗教の言語化過程、そして序文で示した意味での「ベルクソン宗教哲学」は、いわば「高度な知的努力」としての性格を有するものとなるだろう。

結語

本稿では、ベルクソンにおける哲学的方法論と動的宗教論の構造的類似をとりわけ言語の問題を軸に指摘し、さらにそれを「知的努力」の議論と接合させることを試みてきた。これによって、ベルクソンにおいて哲学と宗教が共通する類型性を有していること、そしてそれが心理学的文脈との連関を有していることの一部が示されたと言えるだろう。しかしながら、今後一層掘り下げていくべき論点は未だ多く残っている。とりわけ、第三節でなされた接合作業は、たとえば『物質と記憶』の枠組みを踏まえた三種類の知的努力の比較検討を経ることによって、より精緻化させることが可能であろう。

最後に、より長期的な課題も示しておきたい。今回はベルクソンにおける宗教と哲学との関係を言語との関連に絞って論じた結果、「語り得ぬもの」としての哲学的直観と創造的情動との関係自体には深く踏み込むことができなかった。すでに触れたように創造的情動もまた「直観」であるとされていることに加え、『二源泉』の第三章では、神秘家の経験が哲学的探求をも補強しうることを示唆されている。そこで言われていることの内実を解明すること、さらにはそれを本稿で述べた言語の問題とも連関づけ、ゆくゆくは「ベルクソン宗教哲学」の統一的解釈を提示すること。これを当面の目標としたい。

凡例

・ベルクソンの著作からの引用にあたっては、以下の略号を用いた。

DI : *Essai sur les données immédiates de la conscience*

ES : *L'énergie spirituelle*

DS : *Les deux sources de la morale et de la religion*

PM : *La pensée et le mouvant*

注

¹ 杉村（2010）を参照。

² のち改変を経て論文集『思考と動き』（1934）に再録。本稿では『思考と動き』版を参照する。

³ のち論文集『精神のエネルギー』（1919）に収録。

4 ベルクソンがここで自我の持続を挙げているのは、それが直観可能な実在としてもっともアクセスしやすい事例であるからであって、唯一の事例であるからではない。というのも、ベルクソンのいう直観とはただ持続するおのれの自我を内から眺めるだけの、閉じた自己観照のようなものではない。『物質と記憶』の第一章で詳述されているように、ベルクソンの立場からすれば、私が認識するのは内的な表象だけであるとする観念論の立場も、外部に客観的世界の実在を措定する実在論の立場も、ともに閉じた「私」という定点を前提としている点において誤りである。それゆえ、直観もまた決して自己の閉域にとどまるものではなく、『思考と動き』所収の「序論（第二部）」で述べられるように、たとえば共感や反感といった「心理的な浸透現象」（PM28）によって外部へと開かれうるものである。

5 ベルクソンはここで、経験論者（テーヌやJ・S・ミルの観念連合説の立場）と合理論者（カント以降のドイツ観念論の立場）の論争を念頭に置いており、続く箇所では両者の批判がなされる。

6 本稿では割愛してしまったが、同じ『思考と動き』所収の論文の中でも、たとえば「序論（第一部）」における文学との対比や「哲学的直観」における「媒介的イマージュ」の議論は「形而上学入門」の言語論を補完しうるものである。

7 ベルクソン研究の第一人者でもあるジャンケレヴィッチは、ベルクソンの哲学を「探究の理論が探究それ自体と渾然一体となった哲学」（Jankélévitch (2015), p.5）と評している。なお、藤田（2022）は、ベルクソンの哲学を「持続」や「生の弾み」といった〈メジャーな概念〉と経験の微細なニュアンスに寄り添う〈マイナーな論理〉との緊張関係において捉える試みであり、ここで言われている事柄をより踏み込んで理解する上で有益である。

8 原書編者注I-141（p.397）にあるように、ここで取り上げられている箇所は『マタイによる福音書』5.21-48に該当する。

9 序文で引用したように、開かれた道德-動的宗教もまた直観であるといわれる。しかし、「形而上学入門」の直観と『二源泉』の直観をただちにイコールで結びつけることはいささか早急であろう。両者（および『創造的進化』）の直観論のステータスの比較が今後の課題となる。

10 ここで「意識の諸平面」の内実について深く立ち入ることはできないが、それが『物質と記憶』の有名な逆円錐の図における、純粹記憶と知覚のあいだに見られる諸断面に該当することだけさしあたり明記しておく。

11 ベルクソン自身が指摘するように、このことは、たとえば外国語の聴き取りをしている場面を想定すれば理解しやすいだろう。我々が慣れない外国語の会話を耳にするとき、その発

音から意味の把握を経由せずして言葉を一言一句聴き取ることが到底不可能であるということ
ことは容易に想像がつく。

¹² もっとも、「形而上学入門」では専ら概念とイメージが取り上げられていたのに対し、『二
源泉』では最終的に「語という鋳型」が問題となっており、厳密には両者の間には位相の違
いがある。

¹³ 笠木（2008）を参照。

¹⁴ もっとも、ベルクソンにおける直観と日常的な知覚との境界は、たとえばカントのそれほ
ど強いものではない。カントは現象の認識にかかわる「感性的直観」(sinnliche Anschauung)
と物自体の認識にかかわる「知的直観」(intellektuelle Anschauung)を区別した上で、後者は
神の能力であり、人間には到達し得ないものであるとした。これに対し、「変化の知覚」(1911、
のち『思考と動き』収録)のベルクソンは両者を根本的に隔てることをせず、通常の知覚の
拡張によって実在の絶対的認識へと到達しうることを示している。

¹⁵ たとえば「変化の知覚」や「哲学的直観」(1911、のち『思考と動き』収録)などでは、
哲学と芸術がともに日常的偏見のヴェールから自由になり、深い世界認識を得られるもの
として位置付けられる。

参考文献

Bergson, Henri. [1889]. *Essai sur les données immédiates de la conscience*, Paris, Quadrige, PUF, 2019

(邦訳)『意識に直接与えられたものについての試論』合田正人・平井靖史訳、ちくま
学芸文庫、2002

———. [1896]. *Matière et Mémoire*, Paris, Quadrige, PUF, 2019

(邦訳)『物質と記憶』杉山直樹訳、講談社学芸文庫、2019

———. [1919]. *L'énergie spirituelle*, Paris, Quadrige, PUF, 2018

(邦訳)『精神のエネルギー』原章二訳、平凡社ライブラリー、2012

———. [1932]. *Les deux sources de la morale et de la religion*, Paris, Quadrige, PUF, 2018

(邦訳)『道徳と宗教の二つの源泉』合田正人・小野浩太郎訳、ちくま学芸文庫、2015

———. [1934]. *La pensée et le mouvant*, Paris, Quadrige, PUF, 2019

(邦訳)『思考と動き』原章二訳、平凡社ライブラリー、2013

Jankélévitch, Vladimir. [1959]. *Henri Bergson*, Paris, Quadrige, PUF, 2015

(邦訳)『アンリ・ベルクソン』阿部一智・桑田禮彰訳、新評論、1988

『聖書 新共同訳——新約聖書詩編つき』日本聖書協会、1987

笠木丈「自由の不確定な志向性——「動的図式」と前期ベルクソン自由論」『宗教学研究室紀要 vol. 5』68-89、京都大学宗教学研究室、2008

杉村靖彦「〈ポスト哲学的〉思索と〈宗教的なもの〉：現代フランス哲学と京都学派の哲学から」『宗教研究 83 卷 4 号』1113-1133、日本宗教学会、2010

杉山直樹「持続と呼びかけ——二つのベルクソニズム」『人間社会文化研究 7』1-25、徳島大学総合科学部、2000

——『ベルクソン 聴診する経験論』創文社、2006

藤田尚志『ベルクソン 反時代的哲学』勁草書房、2022

吉野斉志「直観と言語——ベルクソンの認識論と方法」『宗教学研究室紀要 vol. 14』78-95、京都大学宗教学研究室、2017